

## 論文要旨

学位論文題目：ポスト青年期を生きる高学歴独身女性たち——島根県と首都圏でのインタビュー調査をもとに

氏名：郭麗娟

### 目的と研究方法

青年期から成人期への移行 (transitions) は、かつて学卒、就職、離家、結婚などの一連のライフイベントが短期間に規則性をもって継起することで完了するとみなされていた。しかし、西欧では 1980 年代から、日本では 1990 年代後半から、経済のグローバル化や少子高齢化などの構造的変化を背景として移行期のライフイベントの順序性や間隔などに変化が生じ、この期を「ポスト青年期」と呼ぶ研究者も現れた。本研究は、4 年制大学卒業以上の高学歴独身女性を対象として、現代日本の高学歴独身女性のポスト青年期における移行の諸相を、各キャリア内のライフイベントの継起、複数のキャリア間の関連を視野に入れ、地域移動や居住地の社会経済的背景の影響を踏まえて考察することを課題とする。また、このような考察を通じて、彼女たちの「自立する」ことや「大人になる」ことの意味づけの特質を明らかにする。

上記の研究目的のもと、以下の 3 つのリサーチクエスチョンを設定した。

- ① 高学歴独身女性たちは学卒後、どのような職業キャリア（就職、転職など）と家族キャリア（親との関係変化、同別居など）を経験しているのか。
- ② 高学歴独身女性たちは結婚や将来の職業キャリアにどのような展望を抱いているのか。
- ③ 高学歴独身女性たちは「自立する」ことや「大人になる」ことをいかに意味づけているのか。

分析資料は、島根県及び首都圏に在住する 20-30 歳代の女性 31 名（島根県出身・島根県在住者 12 名/首都圏出身・首都圏在住者 11 名/地方出身・首都圏在住者 8 名）を対象とする反復的な半構造化インタビューにより得た。

### 結果・考察

3 つのリサーチクエスチョンに関わる主要な知見は、以下の通りである。

①対象者の学卒後の職業キャリアと家族キャリアについては、主に 3~5 章で取り上げた。調査対象者の学卒後の職業キャリアは、順調な者から非正規雇用・低収入の立場に甘んじる者まで多様であった。この道筋を分けるもっとも大きな要因は、地域移動と居住地による 3 グループの差異であることが確認された。島根県出身者の大半は、地元での就職の理由として、地域への愛着、親や祖父母への愛着や期待に応えたい思い、地元の友人関係、結婚・出産後の親族からの育児支援への期待を挙げた。一方、首都圏出身者は職業キャリアの可能性を広げる場として、首都圏で就職することを当たり前だと考えてい

た。それに対して、首都圏在住者は、中高生の頃から首都圏や海外で就職し、職業キャリアを展開したいと考え、大学進学や就職を機に首都圏に移動した。初職への移行は後の職業キャリアの展開に累積的に影響し、職業上の地位、収入、仕事のやりがい、将来ビジョンにおける差異をもたらしていた。島根県出身者の非正規・不安定職に就いた者は、地域経済の制約の中で転職したくてもできず、職業キャリアにおける上昇機会が乏しい。一方、首都圏出身者と首都圏在住者は、より自己実現ややりがいを感じられる職場を求めて転職を行っていた。就職は経済的自立の第一歩だとはいえ、島根県出身者は長期的な不安定状況を生き抜くため、首都圏出身者は生活水準を落とさないため、親と同居を続けていた。しかし、彼女たちは同居を結婚するまでの期限付きの親孝行の期間だと考えていた。

②結婚や将来の職業キャリアへの展望については、主に第6章で考察した。調査対象者の将来へのライフコース展望は、状況に応じた職業キャリアの調整を考えつつ、結婚・子育てを中心に置くライフスタイルへと収斂していく傾向がみられた。またその展望には、親や将来の配偶者の経済力・支援可能性が重要な要件として織り込まれていた。島根県出身者は将来の生計維持の基盤を結婚生活に求め、家計の中心的な担い手を夫に期待している。彼女たちは独身時から将来に渡って、「個人」単位ではなく、「家族」単位で生計維持の可能性を考えている。一方、首都圏出身者と首都圏在住者は、結婚・出産を機に、配偶者の社会経済的条件次第で、自身の働き方を変えていこうと考えている。ところが、多くの対象者は、「妊娠・出産適齢期」言説や結婚・出産して「一人前」という規範から距離を置けない時に焦燥感を抱く一方で、結婚・出産にこだわらない生き方への志向性も持ち、アンビバレントな心情が示された。

③「自立する」ことや「大人になる」ことの意味づけについては、実証全体にわたって考察した。ポスト青年期のさまざまな移行を通して、調査対象者たちの「自立」観念が書き換えられていた。就職は「親からの自立」の第一歩とみなされるが、その後の職業キャリアの展開のなかで「個人としての自立」が問題視されるようになる。しかし、ポスト青年期の後半になると、職業キャリアの順調さの差異にかかわらず、全般的に結婚・出産してこそ一人前というジェンダー化された自立意識が強化されていた。

## 結論

本研究では、高学歴独身女性の学卒後の職業キャリアの展開と経済的自立における多様性を確認した。また、結婚を強く望む多くの対象者は、結婚・出産を中心に置く将来のライフプランへと収斂していく傾向がみられたが、結婚相手の経済力、親からの子育て支援の可能性との兼ね合いで考える職業キャリアの展望は多様であった。彼女たちのポスト青年期の移行は、地域経済やジェンダー規範などの構造的要因、親からの支援可能性など家族的要因に規定されつつ、もう一方で、個々人の主体的な選択の側面も見出すことができた。